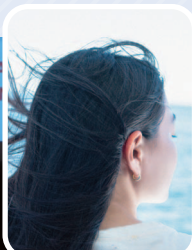


第3回TAMA映画フォーラム特別上映会レポート

SUPER HAPPY FOREVER

ゲストに監督の五十嵐耕平さん、出演の宮田佳典さん、ホアン・ヌ・クインさんがご登壇。なんとクインさんは初日舞台挨拶以来初のご登壇となりました。撮影時の緊張やトラブルの話題など終始チャームな雰囲気でご貴重なトークとなりました。またトーク後には緊急でサイン会を開催！実行委員会内でも人気の高い本作の素晴らしい、ご来場のお客様と分かち合えた瞬間となりました。



©2024 NOBO / MLD Films / Incline / High Endz

第4回TAMA映画フォーラム特別上映会レポート

コット、はじまりの夏

学校や家族の中で孤独な9歳のコットが親戚家族に居候する、ひと夏を描いたアイルランド映画。梅雨時にもかかわらず、多くの方にお越しいただき、上映後には大きな拍手が上がりました。トークゲストには、社会福祉法人こぼと会理事長の元井由隆さんと映画評論家・ジャーナリストの大森さわこさんを迎えて、教育的視点と芸術的視点から作品を深掘りし、充実した上映会となりました。



©Inscéal 2022



たまシネマ隊募集



TAMA映画フォーラム実行委員会では、2025年11月に開催される「第35回映画祭TAMA CINEMA FORUM」に向けて、映画祭直前から映画祭期間の10月～11月の期間限定ボランティアである「たまシネマ隊」のメンバーを募集しています。「たまシネマ隊」メンバーには、準備作業（DM発送作業など）、広報活動（チラシ配り）と、映画祭当日の運営に協力していただき、実行委員と一緒に映画祭を作り上げていただきます。ご興味のある方は、ぜひ募集説明会にご参加ください。公式HP又は二次元コードからお申し込みいただけます。



TCFからのお知らせ

映画祭 TAMA CINEMA FORUM 公式YouTubeチャンネル

<https://www.youtube.com/c/tamaeiga-official/featured>



支援会員さまを募集中！

映画祭を資金面でサポートいただける支援会員さまを募集中です。限定特典もご用意しております。詳細はHPにて。



【支援金寄付 個人会員】一口1,000円から
郵便振替番号：00160-5-541123

加入者名：TAMA映画フォーラム実行委員会

<https://www.tamaeiga.org/support/>

今年の夏も映画がアツイ！

たまシネマ通信

TAMA CINEMA FORUM

夏号 2025年7月19日発行



2025年第5回TAMA映画フォーラム特別上映会作品

『家主 May the DOOM be with you』



たまシネマ通信 2025年夏号 (2025/7/19発行)

発行元：TAMA映画フォーラム実行委員会 〒206-0025 多摩市永山1-5 ベルブ永山 (永山公民館内)

編集・デザイン：TAMA映画フォーラム会報部会／企画・協力：TAMA映画フォーラム実行委員会

※掲載写真の権利はTAMA CINEMA FORUMに帰属します。 ※無断転載を禁じます

CONTENTS

◎特別上映会企画チームより ◎TCF実行委員 これが私の推し映画！ ◎特別上映会レポート

特別上映会『家主 May the DOOM be with you』企画チームより

家主、良いバンドです。同じ時代に生きててよかった…そう思います。好きなバンドの活動を楽しみにできると、物凄く幸せです。もし今日はじめて家主を知った方、帰り道に聴いてみてください。家主のライブ、最高です。次はライブ会場でお会いしましょう。この場を借りましてゲストの御三方、権利関係者の皆さま、ご調整頂いたNEWFOLKの須藤さまに心より感謝申し上げます。



企画チームのオススメ曲3選

オープンエンド

名曲です。田中悠平さんの曲ってどの曲もあたたかくて、なつかしい。じんわりと心の中に染みこんでくるような、そんな感じがします。そして繊細なコーラスワークと、「行きたいとこへ 行きたいだけさ」という素朴だけど、どこか熱を感じる歌詞が大好きです。この曲はベースの田中さんがギターボーカルかつ、ギターの谷江さんがベースを弾く曲なので、ライブでは楽器チェンジがあるのですが、それもまたわくわくするんです。いつか仕事や生活に疲れた時、この曲と缶ビールを手に(耳に)、どこか遠くの海を目指したい。私にとってはそんな、宝物のような曲です。

ネタバレ注意

TCF実行委員 これが私の 押し映画！



『オラン・イカン』

監督：マイク・ウィルアン

2024年(シンガポール・インドネシア・日本・イギリス合作)

第二次世界大戦中のインドネシア。上官に背いた日本兵斎藤(ディーン・フジオカ)は捕虜である英兵と日本本土へと送還される。しかし輸送中攻撃を受け、船は沈没。斎藤は英兵捕虜ブロンソンと孤島へ漂着する。本作は『大アマゾンの半魚人』『太平洋の地獄』をモチーフにしたホラーサスペンス。敵対する者同士が島を脱出するべく力を合わせ、ジャングルで半魚人オラン・イカンと戦いを繰り広げる。熾烈を極める対決は、怪物を斎藤が日本刀で仕留めるのかと思いきや…。『ゴジラ キング・オブ・モンスターズ』でキングギドラのパフォーマンスアクターを務めたアラン・マクソンが、半魚人役として異様な存在感を示したのも見どころ。監督は「未知のモノへの畏怖」を勧善懲悪とは違う視点で示すことにこだわったという。生命そのものへと向き合う予想外のラストには心を打たれた。本作は2024年第37回東京国際映画祭にて上映。日本での劇場公開が待たれる。(Ph)

家主のテーマ

—— 家主の曲はいつでも 君の味方なのにさ

—— 早く見つけて！

これほどまでに端的に、家主というバンドの本質を捉えた曲はないと思う。生活につきまとう面倒、気怠さ、焦燥感。言っちゃってどうしようもない日々のもやもや。そんな気持ちに家主の曲は相槌を打つ。うんうん、そっか、なるほどねー。強く背中を押すわけではないかもしれない。でも彼らの音楽はあなたを否定しない。いつでも味方の側で、あなたとの出会いを待っている。

SHOZEN

ザ・ビートルズのようなコーラスワークにハードなギターサウンドが印象的な曲。一聴すると、曲調は賑やかだけど、ちょっと内省的な歌詞が「家主」らしくて気に入っています。「僕は僕を責めるのやめよう」という歌詞にはドキッとしました。多かれ少なかれ、なんだかうまいかないなという時には、自己肯定感は、一時的に下がってしまうものだから、こんな曲には強く反応します。やっぱり、家主の曲は聴く人の味方だなと思いました。

『秘密の森の、その向こう』

監督：セリーヌ・シマー

2021年(フランス)

それは“8歳のママ”だった——。舞台はパリの郊外。祖母を亡くした少女は、母が家を出て行ってしまったある日、森の中で自分と同じ年頃の姿をした母と出会う。この不思議な体験を通して、喪失の悲しみを抱えた母と娘の交流が描かれていく。本作はなんといっても、子どもの描写が素晴らしい。天真爛漫な愛らしさと、幼さの奥に滲む静かな成熟。その対比が巧みに描かれている。身近な人を失った悲しみや孤独と向き合う少女の姿に、大人が思っている以上に、子どもは人の心の機微に敏感なのかもしれないと、ふと考える。さらに特筆すべきは、その映像美である。豊かなニュアンスを持った色彩、柔らかな秋の光、木々の擦れる音、子どもたちの笑い声。夢を見ているかのような、ふわふわとした感覚が余韻として残る。73分とは思えない満足感を観る者に与えてくれるこの映画は、私にとって、いつまでも胸にしまっておきたい宝物のような作品である。(川)

『ゴンドラ』

監督：ファイト・ヘルマー

2023年(ドイツ・ジョージア)

85分の上映時間の中でセリフ一切なし！けれどもめちゃくちゃ饒舌。矛盾してる？ いえしてません、この映画に限っては。言葉があれば分かりやすいけれど色々曖昧になりがちな事実と、言葉がなくてもここまで心情が手に取るように分かる表現の可能性を同時に見せつけられて良い意味でクラクラする。ゴンドラが行き交うたびに縮まる2人の心の距離。すれ違う一瞬の間にどうやって相手を笑顔にしようかと考える彼女達の遊び心を思うと、何だか自然とにまにまてしまう。私の脳内のサンボマスターが「世界じゃそれを愛と呼ぶんだぜ！♪」とめっちゃ大声で叫んでる。いやほんと、コレを愛と呼ばずになんと呼ぶ。ハビネス・イズ・ゴンドラ。この映画が好き。この映画が好きな自分も好き。(遠)